

## 2024年度

## 国語

最初に、以下の<sup>ちゅういじこう</sup>注意事項をよく読んでください。

1. 問題冊子は<sup>かんとくしや</sup>監督者の指示があるまでは開いてはいけません。
2. 監督者の指示にしたがって、解答用紙に受験番号と氏名を記入してください。問題冊子は受験番号のみを記入してください。
3. 試験問題の内容に関する質問には答えられません。それ以外の用事があるときは手をあげてください。
4. 受験中気分が悪くなったときは、監督者に申し出てください。
5. 問題冊子および解答用紙は持ち帰らないでください。
6. 漢字で書くべきところは漢字で書いてください。

受験番号	
------	--

\* 解答に字数制限がある場合は、句読点なども字数として数えます。

【一】 次のそれぞれの問いに答えなさい。

問一 ①～⑥の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 守備のカナメになる。
- ② 学級委員がみんなをシヨウシユウした。
- ③ 屋根からしずくがタれる。
- ④ キカイ体操が得意だ。
- ⑤ オンダンな気候の国。
- ⑥ 北国の冬は寒さがキビしい。

問二 次の熟語と同じ成り立ちのものを一つ選び、記号で答えなさい。

〔新米〕

- ア、造船      イ、昼夜      ウ、未知      エ、海水

問三 次の四つの漢字は、ある共通する部首をつけると別の漢字を作ることができる。その部首名をひらがなで答えなさい。

工・泉・東・宿

問四 次の□に対になる漢字を入れて、四字熟語を完成させなさい。

徹□  
□  
徹□

問五 次のことは慣用句である。( )に入る漢字の総画数を漢数字で答えなさい。

( ) ( ) 目に出る。

【二】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「朔弥は、西森くんが、大好きなんだな。」

お父さんが言うまで、そんなこと考えたことがなかった。でも、確かにそうだ。

「うん、ぼく、西森くんのこと、好きだよ。西森くんは、ぼくの大切な友だちだ。それなのに、お母さんは、西森くんのこと悪いやつって決めつけるんだよ。それって、ぼくのこと信用してないってことだよね？」

ぼくがそう言ったら、お父さんは、<sup>①</sup>ちよつと困った顔をした。

「朔弥も中学生になって、お母さんのことをうつつとうしく思うようになるのはわかるけど、お母さんは朔弥のことが心配なんだよ。朔弥は幼稚園のころ、しゃべらなかつたから、余計にね。学校でなにかあつたらすぐに行けるようになって在宅の仕事を選んだわけだし、一番に考えてるのは朔弥のことだと思うよ。」

ぼくは、お父さんが、お母さんの味方をしたことに、Aした。

「違うよ。お母さんは、ぼくがやることとか、決めたことが全部気に入らないんだ。ぼくは、お母さんの理想の息子<sup>むすこ</sup>じゃないから。」

「そんなことはないだろう。」

「そんなことあるよ。ソーシャルスキルを身につけるとかさ、コミュニケーションスキルがないとやっていけないとかさ。」

「お母さんは、どうにか朔弥に幸せになつてもらいたいんだよ。」

「ソーシャルスキルがなくてちゃ幸せになれないなら、ぼくは一生幸せになれないよ。」

お父さんが、悲しそうな顔でぼくを見る。

「暑いから、もう行こう。」

ぼくはそう言つて、フェンスを離れた。

車に乗ると、お父さんが、ぼくの機嫌きげんを取るように、

「どこか、行くか？」

と言った。

「どこかって？」

「モールでも映画館でも、どこでもいいよ。朔弥の行きたいところ。」

モールなんていつでも行けるし、見たい映画もないけど……、一つ行きたいところを思いついた。

③「ぼく、西森くんの家に行きたい。虫入りの琥珀こはく、見せてもらおうよ。」

そう言ったら、お父さんがうろたえた。

「虫入りの琥珀なんて、見なくてもいいよ。お母さんが言ってたから、どんなのかなと思っただけだし、急に行ったら迷惑めいわくだらう。」

「西森くんの家は、美容院だからだいじょうぶ。お客だったら、予約なしでもいいんだから。ああ、そう、そう。この髪かみ、西森くんのおばあさんに切ってもらったんだよ。」

「それか。なんかいつもと違って、かっこいいなあって思ってたんだ。」

「お父さんも切ってもらえば？」

「美容院で髪を切ったことなんてないよ。」

「じゃあ、初めての経験ができていいじゃない。西森くんのおばあさん、真美子さんっていうんだけど、すぐくうまいんだよ。本当のことを言うと、虫入りの琥珀も、髪を切るのも、どうでもよかった。ぼくは、お父さんに西森くんに会ってもらいたかった。お父さんに、西森くんは、お母さんの言うような悪いヤツじゃないってことをわかってほしかったんだ。」

しつこく西森くんの家に行こうと言っていたら、とうとう、お父さんが折れて、

「まあ、散髪さんぱつに行かなくちゃと思ってたところだし、お邪魔じゃましてみるか。」

と、西森くんの家に行くことになった。

「いらつしやいませ。」

アーチ形のドアを開けると、おばあさんの髪をカットしていた真美子さんが、僕を見て優しく笑った。

「それでね、孫の誕生日プレゼントに本をあげようと思ったんだけど……。」

おばあさんが真美子さんに話しかけたので、真美子さんは、おばあさんとの世間話に戻ってしまった。

その代わり、奥の椅子で、おばあさんにパーマのロッドを巻いていた西森くんのお母さんが、

「黒田くん、いらつしやい。今日はお父さんと一緒？」

と、話しかけてくれた。

「初めまして、朔弥の父です。」

「初めまして、諒の母です。その節は、虫入りの琥珀なんて高価なものをいただいてしまって、どうもすみませんでした。」

お父さんは、B していた。たぶん、西森くんのお母さんが、とんでもなく若いから驚いているのだろう。

「黒田くん、諒、呼ぼうか？」

西森くんのお母さんが、ぼくにそう聞いてくれた。

「あ、はい、でも、今日は、お父さんの髪を切ってもらいたくて来たんです。」

ぼくがそう言ったら、お父さんが目をぱちくりさせて、ぼくを見た。

「ああ、そうだったんだ。シャンプー、カットでいいですか？」

西森くんのお母さんが、そう聞くと、お父さんは、

「お忙しそうですから、今日はいいです。」

と、遠慮気味に言った。

すると、真美子さんが、おばあさんの髪をカットしていた手を止めて、

⑤ 「だいじょうぶですよ。十分ほどお時間いただけますか？」

と、お父さんに言った。

「十分ですか。じゃあ、あの、お願いします。」

「なんか、お父さんが、小さくなってる。」

「そんなに恥はずかしがらないでください。男性のお客さんも結構いらっしやるんですよ。そちらにお掛かけになってお待ちくださいね。」

「真美子さんは、お父さんの気持ちなんて、全部お見通しだ。」

「西森くんのお母さんが、奥のドアを開けて、」

「諒りやうー、黒田くんだよー。」

と、西森くんを呼んでくれた。

「ぼくたちは窓際まじぎわの待合スペースに行った。」

「ソファーに座すわると、お父さんが小声で、」

「朔弥、（ Y ）。」

と言った。

「さっき、西森くんのお母さんに、「お父さんの髪を切ってもらいたい」と言ったことを言ってるのかな。」

「あのね、西森くんだけじゃなくて、西森くんのお母さんもおばあさんも、優しくて、なんか話しやすいんだ。」

「そうか。じゃあ、朔弥の周りが、みんな優しく話しやすかったら、朔弥はコミュニケーションスキルを發揮はっぴできるんだな。」

「あ、うん。」

「理屈りくつで言ったら、そうだけど。そんなことありえるのかな。」

「奥のドアが開いて、西森くんが顔を出す。」

「西森くんは、ぼくとお父さんを見つけると、待合スペースまで来て、」

「こんにちは。」

と頭を下げてあいさつした。

「ああ、西森くん、はじめまして。」

お父さんが、立ち上がる。

「ぼくのお父さん。」

「どうも、はじめまして。」

西森くんは、もう一度、軽くお父さんに頭を下げた。

「あのさ、西森くん、お父さんに、虫入りの琥珀を見せてあげたいんだけど、いい？」

「うん。ちょっと待ってて。」

西森くんは、ドアの奥に消えると、すぐに琥珀を持って戻ってきた。

「どうぞ。」

「ありがとう。」

西森くんは、小さな白い箱をお父さんに渡すと、お父さんの隣に座った。

お父さんが、C箱のふたを外す。

「ああ、ほんとだ。虫が入っているね。ハチかな？」

「アブです。」

「へえ。」

「西森くんは、虫に詳しいんだ。」

「ああ、そう言ってたね。」

「これ、おじいさんの遺品なんですよね。そんな大切なものもらっちゃって、すみません。」

西森くんが、<sup>⑥</sup>かしまつて言う。

「亡くなったのは、ぼくの父じゃなくて朔弥の母方の祖父なんだよ。朔弥の母親は、虫が好きじゃないし、ぼくも朔弥も、こう  
いったものに興味がないからね。興味のない人間が持つてるよりも、西森くんが持ってた方が、朔弥の祖父も、うれしいんじゃない

ないかな。」

お父さんがそう言うと、西森くんは、うれしそうに、

「ありがとうございます。」

と言った。

「黒田さん、お待たせしました。どうぞ、こちらにいらしてください。」

「あ、はい。じゃあ、西森くん、またあとでね。」

お父さんは、琥珀を箱に戻して西森くんに渡すと、席を立て、真美子さんのところに行った。

「ごめんね、急に。」

「べつに、いいけど。」

「今日は畑、どうだったの？」

「うん、まあ、水やっただけ。あ、オクラがなってた。」

「ああ、見たよ。」

「学校に行ったのか？」

「うん、お父さんに自慢の畑を見せたかったから。」

「そっか。」

「それで、ここに来たのは、お父さんを自慢の友だちに会わせかけたから。」

ぼくがそう言ったら、西森くんが、

「なんだよ、黒田。そんなこっぴどかしくなること真顔で言うなよ。」

と照れていた。

「今日は、午後もお父さんと過ごすから図書館には行かないよ。明日の朝も、学校には行かないかも。」

「そうなのか？ オクラが収穫できそうだけど。」



「いいよ。またなるでしょ。いっぱい花咲いてたもん。」

「そうだな。あ、そういうえば、きのう、ヤングコーンの皮むいて、ひげ捨てたじゃん。」  
「うん。」

「あのひげ、天ぷらにしたら、うまいんだって。」

ア「えー、ひげって食べられるんだ。」

イ「うん、今日、お父さんと食べようと思って、取っておいたから。」

ウ「そう。衝撃の事実。」

エ「なに、黒田んち、まだ食べてなかったの？」

オ「じゃあ、今日の晩御飯は、天ぷらにしてみよう。」

「いいなあ。おれもヤングコーンのひげの天ぷら、食べてみたかったなあ。」

「来年食べたら？」

「えー、一年も待つのかよ。食べに来てとか言わないの？」

西森さんの必死な様子が、ちよっとおかしかった。

ぼくが、D 笑いながら、

「うん。言わない。だって、四個分しかないもん。」

と言うと、西森くんは、

「しょうがない。じゃあ、おれは、これから一年間、ヤングコーンのひげの天ぷらを食べるために生きていくよ。」

と言った。

「なに、それ、大げさだなあ。」

「大げさじゃない。マジだよ、マジ。」

西森くんが、まじめな顔で、そんなことを言うので、ぼくは、どうリアクションしていいのかわからなくなった。

「なに、黒田。なんで、そんな、困った顔してるんだ？」

西森くんが、不思議そうにぼくを見た。

「だって、西森くん、ヤングコーンのひげの天ぷらを食べるために生きるって、まじめな顔して言うから。」

「うん、だってマジだもん。変か？」

「変ていうか、ぼく、なんのために生きてるんだろうなって考えて、眠れなくなる時があるから、そんな単純なことでもいいのか  
と  
思  
っ  
て。」

「ああ、黒田、いつも考えすぎるもんな。」

「そうかな。」

「うん、哲学者じゃないんだから、そんなに考えなくていいんじゃないの？ おいしいもの食べるためとか、好きなゲームをするためとか、そんなんでいいじゃん。」

⑦ そんなんでいいのか。

「おれ、食べることが好きだから、ほんとに食べるために生きてるぞ。商店街に、ぐるりっていうたこ焼き屋があるんだけど、そのチーズたこ焼きがすげえうまいの。食べたたら、冗談抜きで、ああ、このために生きてるんだなって思う。でも、一皿八百円もするから、月に一回しか食べられないんだよ。もし、うちが金持ちだったら、毎日食べられるのにな。」

そういえば、西森くん、前にも、ぐるりってお店のたこ焼きのこと言ってたな。

「そんなにおいしいの？」

「うん。あのたこ焼き食ったら、ほかのたこ焼きは、ただの小麦粉焼いたのに思える。」

「そのたこ焼きも小麦粉焼いただけじゃん。」

「それが違うんだよ。ぐるりのたこ焼きは、小麦粉から進化しちゃってるんだよ。」

「なにに？」

「芸術？」

「たこ焼きが？」

「食べたなら、わかるよ。『あ、芸術』ってなるから。」

「あははは、なんだ、それ。」

「いや、マジで、『あ、芸術』ってなるんだってば。」

西森くんの、「あ、芸術」が、ツボに入ってしまったって、ほくは笑いが止まらなくなった。

西森くんと話していると、楽しくて時間がすぐに過ぎてしまう。あつという間にお父さんの散髪が終わってしまったって、まだ話したりないのに、と思いながら店を出た。

(花里真希『ハーベスト』〈講談社〉より)

問一

A

D

に入ることをばとして適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じものは使えない。)

ア、ぼかんと

イ、そおっと

ウ、がっかり

エ、しっかり

オ、くくっと

問二

線部X「いらっしやる」の敬語を常体(敬意のない表現)に直して、ひらがな二字で答えなさい。

問三 ( Y ) に入ることばとして適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、適当なことを言っちゃ、だめじゃないか
- イ、コミュニケーションスキル、あるじゃないか
- ウ、どうして、あんな余計なこと言ったんだ
- エ、機嫌がよくなってきたよ、よかったよ

問四 ……で囲まれた部分のア～オを正しい順序に並べかえ、記号で答えなさい。

問五 — 線部①「ちょっと困った顔をした」とあるが、それはなぜか。その理由として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、西森くんの影響が朔弥に対して思った以上に強く、自分が何を言っても今の朔弥には全く響かないと感じたから。
- 2、母親が自分のことを信用していないと言いつける朔弥に、父親としての威厳を示すことができないから。
- 3、朔弥のことを一番に考えているのが父親である自分のはずなのに、朔弥がそれを全く理解してくれていないから。
- 4、本当は息子のことを心配している母親の気持ちを朔弥は理解できず、朔弥自身が母親に不満をもっているから。

問六 — 線部②「理想の息子」とは、どのような息子か。「他者」と「関係」ということばを用いて「息子」と続くように、四十字以内で答えなさい。

問七

——線部③「ぼく、西森くんの家に行きたい」とあるが、ぼくはなぜこのように言ったのか。その理由として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、西森くんが友人としてどれだけ素晴らしいかを、お父さんからお母さんに説明してもらおうと思ったから。
- 2、西森くんが自分にとって大切な友人であることを、お父さんにはわかってほしかったから。
- 3、西森くんが暮らす美容院でお父さんの髪を切ってもらうことで、家族同士のよい付き合いをしたいと思ったから。
- 4、西森くんがお父さんと会うことで、お父さんのうろたえる姿を見られると思うとたまらなく面白かったから。

問八

——線部④「お父さんが目をばちくりさせて、ぼくを見た」とあるが、それはなぜか。その理由として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、朔弥があまりに西森くんのお店に慣れ親しんでいて、普段とは違う素振りに驚いたから。
- 2、西森くんの家の美容院がにぎわっていて、散髪してもらうのに時間がかかりそうだと不安に思ったから。
- 3、朔弥が突然、その場の会話をつなげるように西森くんのお母さんに散髪の提案をし始めたから。
- 4、西森くんのお母さんが朔弥を気づかせてくれたので、その優しさに対して感動したから。

問九

——線部⑤「だいじょうぶですよ」とあるが、このことばで何を伝えようとしているのか。「〜ということ。」につながるように三十字以内で答えなさい。

問十 — 線部⑥「かしこまって言う」とあるが、このときの西森くんのようにして、適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、朔弥の祖父が大切にしていた遺品を父親の許可なくもらってしまった、恐縮おそまじしている。
- 2、おじいさんの遺品を朔弥にも黙だまってもらってしまったことを、後悔こうかいしている。
- 3、自分に対してよい印象を持っていない朔弥の父に会ってしまったので、緊張きんちやうしている。
- 4、家族を傷つけないように亡くなった人のことを話すのはとても難しいので、困惑こんわくしている。

問十一 — 線部⑦「そんなんでいいのか」とあるが、これはどういうことか。適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、なんのために生きているかわからなくなっているのに、提案が単純すぎて納得なげいかないということ。
- 2、楽しく生きるためには、ヤングコーンのひげの天ぶらまで食べなければいけないのかと疑問に思ったということ。
- 3、生きている意味は考え続けなければならないが、哲学者ほど考えなくてよいということ。
- 4、生きていくためには、考え過ぎずに身の回りのささやかな幸せを楽しみにすればよいということ。

### 【三】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

#### ウソをつく理由

本書の冒頭でも紹介したように、私たちは日々の生活で少なからずウソをつきます。当然、わざわざウソをつくには理由があります。その理由にはさまざまなものがありますが、本書ではアルダート・ヴレイによる分類を紹介したいと思います。ヴレイはウソの研究で世界的に活躍している心理学の研究者です。筆者は今から10年以上前に、日本で開催された国際会議で彼の講演を初めて聞いたのですが、とても明快かつ A な講演でした。私のプレゼンテーションに対しても、笑顔でコメントをもたえたことを、今でもよく覚えています。

ヴレイは、ウソをつく理由を3つの次元で分類します。

- (1) 自分のためか、他人のためか。
- (2) 利益を得るためか、不利益や罰を避けるためか。
- (3) 物質的な理由か、心理的な理由か。

それぞれの次元について、具体例をもとに考えてみましょう。

(1)は利己的なウソか利他的なウソか、ということですが。私の学生時代のある先輩は、就職活動での面接の際に「自分は演劇部の部長をしていた」というウソを頻繁に①していました。部活動などでリーダーシップを取っていた経験が、企業から評価されることが多いからです。入社後にバレたらどうするつもりだったのか、先輩の気持ちは今となってはわかりませんが、これは明らかに(2)です。過去の研究でも、大学生の多くが職を得るためならウソについてもよいと考えていることが報告さ

れています。

利他的なウソの例も考えてみましょう。ある日、会社の社長から、あなたの後輩の仕事ぶりについて聞かれたとします。最近、その後輩の上司が退職したため、ポジションが空き、社長は後輩を昇進させることを考えているようです。あなたにとって、その後輩の仕事ぶりは可もなく不可もなくといったところですが、その後輩とは仲が良いこともあり、社長には「彼はとても仕事ができます。みんなが彼を頼りにしています」と答えました。

このウソは、自分の後輩が出世できるように仕向けよう、という【a】をもった利他的なウソと言えます。このように社会生活の中では、ウソをつくことで自分ではなく、他人に利益を与える場合があります。ただし、利他的なウソはそれほど頻繁ではなく、日常生活では利己的なウソの方が使われやすいとされています。

(2)の利益を得るためか、不利益や罰を避けるためか、の次元でみると、前述のウソの例は、どちらも利益を得るためのウソに該当します。③不利益を避けるためにつくウソの例としては、次のようなウソが考えられます。

あなたの母親が病気のため、「b」いくばくもない状態になってしまったとします。母親はあなたが大手企業でバリバリ働いていることを、とても誇りに思っています。ある日、母親のお見舞いに行くと、「仕事の調子はどうか？」と聞かれました。実は会社の経営状況が最近著しく悪化しており、あなた自身もリストラの候補にあがっているほどでしたが、あなたは母親に「すごく調子が良くて、充実しているよ」と答えました。

この例は、自分がウソをつくことによって、母親が心配するという【B】な結果を避けるためのウソです。こっそりおやつを食べてしまった子供が、叱られたくないがためにごまかそうとするウソは、罰の回避が目的です。利益の獲得よりも罰の回避の方が、ウソの動機づけに対して、より強い影響を与えるという研究もあります。

(3)の物質的な理由か、心理的な理由かの次元は、比較的わかりやすい分類です。会社のお金を横領するために帳簿を改竄するのは、金銭を得るといって物質的な理由によるウソと言えます。一方、他人から賢く思われたいがために、つい知ったかぶりをした、というケースは、心理的な理由によるウソと言えます。ウソをついてでも出世をして、財産から名誉まであらゆるものを手に入れたい、といった物質的・心理的な理由を双方含む場合もあるでしょう。



これら3つの次元は必ずしも互いに独立していないため、複数の理由が混在するケースも多々あります。これまでとりあげたウソの事例は比較的 **C** な例ですが、ひとつのウソが自分にも他者にも影響することがありますし、利益と不利益が同時に発生することもあります。たとえば、先ほどとりあげた後輩に対する利他的なウソの例も、後輩が出世することで自分も満足感が得られるといった場合もあるでしょう。そのため、純粹に利他的と言ってよいかどうかは、議論の余地があります。<sup>④</sup>

ウソをつく理由は多様で複合的であり、ふとした拍子にウソをつける機会は無数にあります。ウソは真実を覆い隠してしまう厄介なものです、その理由や状況によっては、人間関係に波風を立てたり《I》が立つのを避けたりするための「潤滑剤」としても機能します。ウソは私たち人間が円滑な社会生活を営むうえでは、必須のツールでもあるのです。<sup>⑤</sup>

## 動物のあざむき

さて、ウソが言語的なコミュニケーションの一部だとするならば、言語をもたない動物にはウソはないと言えるでしょうか。もちろん、人間と同じようなウソをつくことはできませんが、非言語的なコミュニケーションを含めたより広範な「欺瞞」であれば、動物でも不可能ではありません。

生物を対象とした研究では、「あざむき」という言葉を用いることが多いのですが、人間以外の動物の世界でも、実際にあざむきが存在するという証拠が報告されています。それらは大きく、「<sup>⑥</sup>遺伝的あざむき」と「戦術的あざむき」に分類できます。遺伝的なあざむきとは、主に昆虫などに見られる擬態を指します。テレビや図鑑などで、木の葉そっくりなコノハムシや、木の小枝にそっくりなナナフシなどを見たことがあるでしょう。彼らは自分を別のものに似せることで、捕食者の目をあざむいていると言えます。

托卵も遺伝的あざむきの例と考えられます。托卵とは、卵の世話を他の個体に托する動物の習性を指します。鳥類、特にカッコウの例が有名ですが、魚類や昆虫類でも観察されています。カッコウは、ホオジロやモズといった他の鳥類（仮親）の巣に卵を産み、孵化したカッコウの雛は、仮親の卵や雛を巣の外に押し出してしまいます。結果として、カッコウの雛は仮親から餌を

もらって成長し、巣立っていくことができます。カッコウの卵は仮親の卵に似ているため、仮親の目をあざむくことができます。そのため、周囲の状況に応じて他の戦略をとる、といったことはできません。コノハムシは木の葉以外の形にはなれませんが、カッコウの托卵では、仮親を自由に選べるわけではありません。

その一方で、人間や人間以外の霊長類（チンパンジーやオランウータンなど）は、《Ⅱ》な戦術的あざむきを行うことができます。ホワイトウンとバーンは、確かにあざむきであると思わせる霊長類の行動事例を複数集めています。それらの事例は5つのグループに分類されます。

- (1) 隠蔽する―音を出さない、姿を隠す、物を隠すなど、( i )。
- (2) はぐらかす―他者の注意を別のところへ ( ii )。
- (3) 装う―外向きの行動を装う。( iii )。
- (4) 社会的道具を利用する―関係のない第三者を利用することで、( iv )。
- (5) 身代わりにする―他者をあざむいて第三者を攻撃させることで、( v )。

こうして見てみると、人間以外の霊長類のあざむきも、内容が多岐にわたることがわかります。特に、隠蔽する、はぐらかすといった、他者の注意の状態を逸らすものが多いことがわかっています。つまり、他者が何に注目しているのかを敏感に察知する傾向があると考えられるわけです。

（阿部修士『あなたはこうしてウソをつく』（岩波書店）より）

問一

A

〜

C

に入れることばとして適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じものは使えない。)

ア、シンプル

イ、エネルギー

ウ、グローバル

エ、ネガティブ

問二

線部 X・Y と同じ用法のものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

X「ように」

ア、そこに入らないように言ったはずだ。

イ、練習したので逆上がりができるようになった。

ウ、まるで春の日のようにあたたかい日だ。

エ、よく見えるように高いところに登った。

Y「れ」

ア、世界的に活躍されている先生の講話。

イ、あらゆるものを手に入れたい。

ウ、犬に食べられてしまった。

エ、今日は自分から起きられた。

問三

【 a 】・【 b 】に入れる二字のことばを次の漢字を組み合わせそれぞれ作りなさい。

注 命 意 生 余 凶 見 使

問四

《 I 》に入れることばを漢字一字で答えなさい。

問五

《 II 》に入る四字熟語として適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、臨機応変

イ、意味深長

ウ、無味乾燥

エ、完全無欠

問六 本文には次の一文がぬけている。どこに入れたらよいか、この直後にくる六字をぬき出しなさい。

擬態や托卵は、いずれも遺伝的に決まっております、生まれながらに備わっているものです。

問七 — 線部①「ウソを頻繁にっていました」とあるが、なぜこのようなウソをつくのか。その理由として適切なものを次

の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、自分が得をするようなウソは、多くの大学生が就職活動において利用してもよいと考えているから。
- 2、自分が就職するためにつくウソは、ウソとして認識されずに企業から評価されることが多いから。
- 3、就職活動中のウソは、入社後に正直に謝ることで許されるとみなが思っているから。
- 4、就職活動を行う上でのウソは、多くの人にとってウソが実現できるように努力するきっかけとなるから。

問八 (②) に入ることばを文中から六字でぬき出しなさい。

問九 — 線部③「不利益を避けるためにつくウソの例」とあるが、それはどのようなものか。同じような内容を示したものと

して、適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、母親が出掛けている間に大事なお皿を割ってしまったので、慌ててボンドで修復した。
- 2、財布にお金が入っていないなかったので、本当は欲しかったものを欲しくないと行って買わなかった。
- 3、宿題を忘れたことに対して、お母さんがまちがって捨ててしまったと言いつつ買わなかった。
- 4、ごほうびをもらうために、定期試験の結果を十点以上よい点数で報告した。

問十 — 線部④「議論の余地があります」とあるが、なぜ「議論の余地」があるのか。その理由を本文中のことばを用いて、三十文字以内で答えなさい。

問十一 — 線部⑤「『潤滑剤』としても機能」とあるが、そのように機能している「ウソ」として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、そうじ場所に誰もいなかったので、そうじはしなかったが、先生にはしたと報告した。
- 2、友人が帰りづらそうにしていたので、とっさにありもしない予定を作って自分からその場を離れた。
- 3、お母さんが作ったお弁当を、みんながほめてくれたので思わず自分が作ったと自慢した。
- 4、牛乳をこぼしたのは自分だが、親を怒らせないように自然とコップが倒れたと伝えた。

問十二 — 線部⑥「『遺伝的あざむき』と『戦術的あざむき』に分類できます」とあるが、「戦術的あざむき」として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、ハイエナは、ライオンが狩りをしたあとの獲物を食べることで生き延びている。
- 2、コチドリは敵を巣から遠ざけるために、怪我をしたふりをして巣から離れて敵をおびき寄せる。
- 3、カメレオンは、餌を取る手段として自身の身体の色を自在に変えることができる。
- 4、クジャクはメスを引き寄せるために、オスの羽根がきらびやかな模様をしている。

問十三

——線部⑦「5つのグループ」とあるが、i、vに入ることを次の中からそれぞれ選び、番号で答えなさい。

- 1、中立的、友好的、あるいは威嚇的いかてきに装う。
- 2、他者から何らかの情報を隠す。
- 3、引き付けることによってあざむく。
- 4、自分の目標を達成する。
- 5、本来の相手をあざむく。

問十四 次の会話を読んで、あとの問いに答えなさい。

さくらさん 「『ウソをつく』ってことは色々な意味があることを知らされました。」

はやしさん 「『ウソつきは泥棒どろぼうの始まり』なんて、小さい時に言われたことがあるよ。」

先生 「私たちは生活の中で、『ウソをつくことはいけない』と教わるのがほとんどです。でも中には完全悪ととらえずに、『良いウソ』と言えるものもありそうですね。」

さくらさん 「ウソをつく理由の中には、もちろん『物質的な理由』のところでも挙げられているような横領といった犯罪行為もあるので、それに関しては、やはり『ウソをついてはいけない』という気持ちにさせられます。」

はやしさん 「相手を傷つけたり、罪を犯おかしたりしなければ『良いウソ』ってことでいいのかな。」

さくらさん 「それは難しいところね。例えば自分をよく見せたいと思ってウソをつく『心理的な理由』は、他人を傷つけることはないけれど、本当に『良いウソ』とっていいのかな。」

はやしさん 「確かに自分を良く見せるためのウソは、見栄みえを張っているみたいだし、『良いウソ』というのは少し違う気もするな。」

さくらさん 「じゃあやっぱり『ウソは全て悪』というのが正しいのかな。」

先生 「さて、二人は『ウソの善悪』について語っていましたが、この作品を通して、ウソについて見直してみましよう。ウソとは、  
》

問 《 》に入る先生のことばとして適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、動物において他者の注意を逸らすために使われるものの一つです。内容が多岐にわたるからこそ、ウソをつく自身もだまされてしまうおそれがあり、私たち自身も十分に注意することが大切です。
- 2、様々な視点から見ることで、人々にとって欠かせないコミュニケーション手段です。そしてなおかつそこに存在する「善悪」は使う人によって決められていくあいまいな存在なのです。

- 3、 私たち人間の世界だけのものではなく、動物たちも自分たちの生存競争において欠かせないものとなっています。その中でも、霊長類だけが擬態やあざむきを利用して、巧みにコミュニケーションをとっているのです。
- 4、 善悪を一概に判断するものではなく、その目的は多様で複合的なものとなっています。だからこそウソは悪と決めつけることはできず、人との関係性の中で欠かすことのできないものもあるのだということです。



国語 解答用紙

受験番号
氏名

得点

問一	⑤	①
	⑥	②
	③	
	④	

問二

問三

問四 徹

徹

問五

画

問一	A
	B
	C
	D
	問二

問三

問四

↓

↓

↓

↓

問五

問六

問七

問八

問九

問十

問十一

息子

とらうと。

問一	A
	B
	C
	問二
	X
	問五
	Y

問三

a

b

問四

問七

問九

問六

問八

問十

問十一

問十二

i

ii

iii

iv

v

問十三

問十四